

緩和ケア病棟

NI（ナーシングインディケータ）

在宅復帰率

背景

緩和ケア病棟は、痛みや吐き気など辛い症状のあるがんの患者さんで、緩和ケアを希望する方を対象に、苦痛を和らげ、最後までその人らしく有意義に過ごしていただく役割がある。一般的に緩和ケア病棟は、一度入院すると、看取りとなるケースが多い中、当院の緩和ケア病棟「たいよう」では、できるだけ長く住み慣れた生活の場で過ごしていただけることを大切にしている。

まず、外来通院中に、がんそのものの治療が困難となっても、外来看護師が意思決定支援に積極的に取り組み、がんサポートチームと連携しながら、必要な時期に必要なサポートが提供できるような体制をとっている。そして、外来の情報をもとに、患者および家族の希望を大切にしながら、「いい時間を生活の場で！」という目標を、緩和ケア病棟、当院の訪問看護ステーション、在宅医と共に共有し、連携の強化に取り組んでいる。

参考データ：2018年日本ホスピス緩和ケア協会の施設概要・利用状況調査報告における、稼働病床数16～20床（139施設）の自宅退院割合平均は12.4%（全退院患者数に対して）、平均在棟日数は33.7日である。

定義

在宅復帰率 = $\frac{\text{自宅および施設への退院患者数}}{\text{全退院患者数（死亡患者数含む）}} \times 100 (\%)$

結果

在宅復帰率	2017年4月～2018年3月	33.8%	平均在棟日数	18.1日
	2018年4月～2019年3月	43.9% ↑		平均在棟日数 16.3日 ↓

<看護師が行った退院指導内容>

- ・内服管理と薬剤指導（医療麻薬など薬剤の種類）
- ・ADL介助
- ・食事に関して
- ・排泄に関して
- ・清潔に関して
- ・介護用品などに関して
- ・先の見通し（退院後起こりうる症状など）

評価

報告書による同規模の緩和ケア病棟（139施設）のデータと比較すると、当院の緩和ケア病棟の在宅復帰率は高く、在棟日数も短い結果となった。これは、外来からの情報を早期に活かしながら、入院初期から早期に症状を緩和し、在宅での生活準備を行いながら、退院支援を行えていることが理由と考える。今後も、患者および家族の満足度や退院後の生活の質の向上に取り組むたい。

